

2017年2月22日

2017年2月 Nr. 431

さて、今回は、学者の研究に関する不正行為（Forschungsbetrug）が話題になっています。

学者たちは知識を創造するものですが、これは独立した研究において完全なる透明さで行われなければなりません。そして、学者たちが互いに批判し合うことが必要です。しかしながらますます多くの研究結果が発表されることにより相互批判が妨げられている状況にあります。発表された研究成果の数は容易に確認することができますが、研究成果の内容を確認することはなかなか難しいからです。

現在医学および自然科学の分野だけで世界中では何と6万種類もの学術雑誌が存在し、ここでは1日に2万件もの学術論文が発表されているとのこと。誤りのある論文は時折、取り消された後で、無効とされますが、論文の発表から取り消しまでの間には既にその論文は他の学者の研究成果に取り込まれてしまっています。自然科学の研究成果は再現できるものでなければなりません、難しい実験ではしばしば誰も一連の実験工程すべてを進んで再度行うことを進んで引き受けたりしないようです。他の研究者の成果については誰もがまずはすべてが正しいと想定し、再度同じ成果にたどり着く目的のためだけには、これを引き受けようとは大抵誰も思わないとのこと。他の研究者の研究成果を確認することは、学術的成果とは見なされないという背景があるためようです。

さて、学者による研究不正行為についてですが、この問題に詳しいオーストリアの専門家は殊に3つの類型を指摘しています。一番目は、誤っていると気づいていながら、つまり故意で、または実に不注意に、つまり過失によりある報告がなされるというものです。例えば、実際はその労を全くとらなかったにもかかわらず、あることを究明したと主張することなどです。2番目は、剽窃すること、すなわち他の人が発表したものをそのことに言及せずに盗用してしまうことです。第3は、ある研究者が自分の主張に合致している箇所だけを使用し、他の情報や実験結果をあつさり省略するというものです。このことは特に新しい薬品の効果を記載する場合にしばしば起きているとのこと。

社会科学においては質問用紙を使って多く作業が行われます。そこでは不正行為は特に立証することが難しいといえます。質問用紙は容易に改ざんできるからです。また質問用紙は、長期間保管する必要がありません。再度アンケートを行うのは高くつくといえます。

不正行為が行われていると感じた者は、それを告発すべきです。しかしながら、そのようなことは専門家しか気が付きませんし、彼ら専門家は互いに知り合いです。ですが、匿名の告発については道徳的に非難すべきだとは思われていませんが、自分の名前を明示しない場合、非難の根拠がたぶん乏しいからだと考える人々もいます。一方では、匿名の非難はしばしばかなり重要なヒントになるといいます。

大抵の学者は教授ではありません。多くの学者は時限契約、すなわち、1年または2,3年などの限られた期間の契約しか締結していません。この期限内にプロジェクトを成し遂げなければなりません。このことは、実験を繰り返す時間がしばしば足りないことを意味し、そこではアンケートの結果にせよ一連の実験結果にせよ都合良く補足して完全なものにしてしまう誘惑が大きくなるといえます……。

さて、学者の研究に関する不正行為に関しては、私はここ数年に起きた二つの「事件」が思い浮かびました。一つ目は2011年のドイツのかつての国防大臣だった Karl-Theodor zu Guttenberg 氏の博士論文盗用とその結果としての大臣辞任と議員辞職です。この件は、ゲーテの授業でも扱いましたのでよく覚えています。論文盗用疑惑が指摘された際、彼は否定していましたが、バイロイト大学から盗用を認定され、博士号を剥奪されるに至り、責任を取って大臣を辞任すると同時に連邦議会議員も辞職しました。かつて好感度が高かった議員で将来の首相候補とも目されていた人物の政界からの退場は大きな衝撃を与えました。二つ目めは、2014年の日本の STAP 細胞騒動です。これが真実であれば画期的な発見でしたので、発表時はもとより論文撤回時も日本のみならず世界的に大きなニュースとなりました。こちらの事件では有能な科学者の自殺者まで生む悲劇となってしまいました。

また、放送で触れている1997年に発覚した Friedhelm Herrmann 氏の事件は当時、ドイツの学会に大きな衝撃を与えたようですが、私自身がドイツに対して関心が薄れた時期でもありましたのでこの事件のことを私は知りませんでした（日本のメディアでも報道されたとは思いますが）。

ところで、今回も語彙に関し私にとっては新しい発見がありました。それは、課題でも触れておりますが、Magazin に意外な意味があることを知ったことです。これまで Magazin は私にとっては「雑誌」がすべてであり、Zeitschrift とほぼ同義だとしか認識していませんでしたが、今回の課題を受けて改めて手元の独和辞書で調べて見たところ、「雑誌」と「ニュースショー」の他に「倉庫、貯蔵庫、(図書館の) 書庫、(美術館・博物館の) 収蔵庫」などの意味があることを知りました。また、手元の独々辞典ではこれらを裏付けるように、語義としては reich bebilderte, unterhaltende oder populär

unterrichtende Zeitschrift は当然として、他に Lager や Aufbewahrungsraum für die Bücher einer Bibliothek oder für die nicht aufgestellten Sammelstücke eines Museums などの記載がありました。語源を調べてみますと、アラビア語の makhāzin (「倉庫」) と記載されていました(ところで英和辞典にも magazine の語源について同様の記載があり、16 世紀に「倉庫」という意味で使用されたものが 17 世紀になって「雑誌」という意味が加わったようですが、ドイツ語においても同じような流れを辿ったものと推定されます)。ということで今回は、Magazin という語に「倉庫」などの意外な意味があること、そして「いろいろなものを所蔵している保管庫」から派生し、「雑誌」や「ニュースショー」という意味になったらしいことを知ることができ大変興味をそそられた次第です。

K. K

2017年3月19日

2017年3月 Nr. 432

さて、今回は、貧困 (Armut) が話題になっています。

今回の特集番組において1年前、レポーターのロート氏 (Herr Roth) が自問したのは、ドイツのような富める国において貧困とはどのように理解されるべきなのか、そして車を保有している者もまた貧しいと言い得るのかということでした。今日のドイツの貧しい人々の状況は、稼ぐお金が少なくて路上で寝ざるを得ないインドのレンガ積み工または十分な食べ物がなかった19世紀のベルリンの貧しい身なりをした日雇い労働者とは当然全く異なるといいます。

貧困という場合、今日のドイツではデパートまたはショッピングセンターの前で跪いて1ユーロを物乞いする乞食、食べ物を買うお金が乏しく、無償の食料を配給窓口の前で大勢して待っているか、レストランで残り物がないかを尋ねる人々、体育館に収容されている難民たち、それに2, 3のビニール袋に自分の全財産を詰め込んでいつも携帯しているホームレスたちを思い浮かべます。

多くの貧しい人達は、孤独で不満を抱いていますし、また文化的小よび情緒的な貧しさにも見舞われることがあります。一方で、文化面の興味を失わず、社会的に活動をしている人は、長期間失業していても、孤独になるには及ばないといいます。というのは、国家がその失業者が十分食べられるようにしてくれるだけでなく、住居も購入できるよう、面倒を見てくれるからです。失業した人は、1年間、失業保険からお金、すなわち最後の手取り収入の67%の給付を受けられということです。これは第一種失業手当 (Arbeitslosengeld I) と呼ばれます。1年経っても引き続き職探しをしている人は、国からお金をもらうのですが、これはしかしながら、自分の貯金で生活できない場合に限られています。この時受給できる第二種失業手当 (Arbeitslosengeld II) は、「ハルツ4」 (Hartz IV) とも言われます。「ハルツ4」とは、フォルクスワーゲンの元人事担当役員ペーター・ハルツ氏 (Herr Hartz) が委員長を務めていた委員会が2002年に提案した4番目の改革案だったことに由来します。これは困窮した失業者のために失業手当と社会扶助とを統合するものでした。

さて、社会科学においては一家計での全所得がドイツの家計の中央値の所得の50%を下回る場合、相対的貧困 (Relative Armut) と言います。しかしここで言う中央値の所得とは平均所得ではなく、社会の中央の所得金額のことです。そしてこの所得中央値の50%にあるのが貧困線であり、さらに所得中央値の40%を下回る人は「極めて貧しい」、つまり「極

貧」とされています。

第二種失業手当は、失業している場合だけでなく、仕事で収入が少なすぎる場合の所得補充として給付を受けるものでもあります。極貧とされるのは、ホームレスたちや不法にドイツに住んでいる移民のような、相対的に小さな集団です。しかしながらストレスや存在不安は貧困に陥る危険性のある人たちにもあるといわれます。彼らは、所得中央値の 60%しか支出できない市民であり、その所得では直に所得中央値の 50%という貧困線を下回ってしまう可能性があります。しかしながら、その危惧される社会的な陥落に対しての抗議については全く聞かれることはありません。

貧しい人たちは、しばしば軽蔑され、疎外感を感じます。少ない収入は、しばしば不十分な教育に起因しますし、しばしば不健康な状態と結びついています。貧しい人々は、そうでない人に比べドイツでも常に寿命がより短い傾向にあります。大抵貧しい人々は、小さな、設備の整っていない住居に住んでいます。その住居のある市区にはまた、多くの貧しい人々が住んでおり、その市区では学校やレクリエーション余暇施設の設備が他の市区より整っていないといえます。

ドイツの国民総生産は過去数十年の間に大きく伸びました。貧困を抑え、克服するための前提条件は現在存在しています。ロート氏 (Herr Roth) は、最も重要なのは完全雇用、つまり 2%までの失業率への復帰のための施策であるといえます。一つの選択肢としては富裕層に対するより高い課税を通じて再分配することではないかといえます……。

さて、一般的には、「貧しい」または「長期間の失業」→「不幸」というイメージがありますが、放送で紹介された「長期間失業」しながらも「豊かである」事例が私の印象に残りました。それはクレマーさん (Herr Kremer) という放送当時 47 歳のマンハイム在住の男性です。彼は長期間レストラン業界にいましたが、長期間失業中で現在は第二種失業手当を受けています。その傍らで職種転換のために教育者としての職業教育を受けています。また併せて教会関連のボランティア活動もしています。端から見れば貧しい部類に入るかも知れませんが、彼自身は貧しいどころか、実は豊かであるという認識でいます。それは彼がレポーターに対しそのボランティア活動や家族について生き生きと、そして満足そうに語る様子からも窺うことができます。

ここ十数年来世界的に貧困の問題がクローズアップされています。グローバル化に伴う貧富の格差の拡大、子供の貧困 (Kinderarmut)、「働く貧困層」といういわゆる「ワーキングプア」(Erwerbsarmut)、高齢者の貧困 (Altersarmut) などの言葉が私にも思い浮かびます。そしてこれらの問題に関連し最近では最低生活保障 (英語ではベーシックインカ

ムまたは略して BI と表現することは知っていましたが、調べたところではドイツ語では *Bedingungsloses Grundeinkommen* という語句がこれに相当するようです) という考え方に注目が集まってきています。最低生活保障についてはたまたま数日前の日本経済新聞にも掲載されていました。同紙によりますと、BI とは政府がすべての人に生活に必要な最低限のお金を配る制度であり、仕事の有無や裕福かどうかに関係なく、例えば 10 万円を皆に一律に毎月支給する仕組みだそうです。フィンランドが今年 1 月から 2,000 人の失業者にも月額 560 ユーロを支給する社会実験をスタートし、2 年間かけて検証するそうです。検証結果が注目されるのですが、私個人の印象としては、膨大な財源が必要になり、その財源の手当のために大きな税負担が必要になるだろうと思われまので、広く実現することは難しいだろうと思います。

ところで、今回話題になっている相対的貧困ですが、最新のデータである OECD の 2014 年の相対的貧困率を Wikipedia より国別にチェックしましたところ、イスラエルの 18.6% (2014 年) が最も高く、アメリカ合衆国の 17.5% (2014 年) がこれに続き、日本は 16.1% (2012 年) で 36 カ国中 7 番目、ドイツは 9.1% (2013 年) で 23 番目、そして北欧はスウェーデン (8.8%) ~ デンマーク (5.4%) と非常に低いことが判明しました。アメリカ合衆国が高く、北欧諸国が低いことは何となく予想していましたが、日本の相対的貧困率がこれほど高いとは想像もしていませんでしたので衝撃を受けました。しかも、日本の 16.1% は、厚生労働省によりますとデータが存在する 1985 年以降、最も高い数値とのもので、今後ますます上昇していくのではないかと懸念がありそうです。日本では失業率は既に 3% 程度が達成されていますので、残る施策としては富裕層への課税強化と貧困層への再配分が必要かもしれません。また、貧しい家庭の子供たちに「子ども食堂」などを通じて食事を与える活動が日本でも盛んになってきているようですが、貧困対策そのものではないにしても貧困に伴う欠食を補う意味でも意義があるように思います。

また、放送で触れられている「フードバンク」(「包装の傷みなどで、品質に問題がないにもかかわらず市場で流通出来なくなった食品を、企業から寄附を受け生活困窮者などに配給する活動およびその活動を行う団体」Wikipedia より) のことをドイツ語では *Tafeln* ということを知りました。手元の独和辞書を調べてみますと *Tafel* には今まで知っていた「板」、「黒板」、「表」の他に「食卓」や「食事」という語義も掲載されていることを確認し、フードバンクを表すドイツ語としての *Tafeln* に納得したところです。併せてこの語義をベースにした *vor/während/nach der Tafel*、*jemanden zur Tafel bitten* などの表現があることも知りました。

K. K.

2017年4月16日

2017年4月 Nr. 433

さて、今回は、先月の貧困（Armut）と関連しておりますが、格差の拡大（Zunehmende Ungleichheit）やその結果もたらされた中間層（中間階級）の縮小が話題になっています。

ドイツでは60年代にはすべての労働者の90%がいわゆる普通の労働条件で働いていました。彼らは、被雇用者に対する解雇からの保護や疾病（健康）保険、年金保険、失業保険の付与された期限を定めない雇用を有していました。しかしながら、市場や経済のグローバル化の影響を受け90年代および21世紀の最初の10年間に低賃金の仕事が増え、それより好条件の仕事が見つからなければ甘んじてそのような低賃金の仕事をせざるを得ませんでした。そして期限付の仕事またはパートタイムの仕事さえもが専門職、自営業（フリー）の人、学者（研究者）、ジャーナリストそして教師にも及んできているといます。

十分な職業教育を受けた求職者にとっても好条件の職を得る機会はこちら数十年の間ますます悪化しています。収入や資産の不平等はますます拡大しています。失業率は下がっていますが、これは多くの人がパートタイムの仕事または期間が限定された労働契約で働いているからという側面もあるようです。その結果彼らはいつもまた失業するのではないかという懸念を抱いています。以前であれば十分な職業教育を受け、努力すれば、家庭、家、車それに毎年の休暇が保証された生活を営むことができたものです。例えその持ち家が大抵の人々にとっては邸宅ではなく、テラスハウスに過ぎないとしても・・・。

現代は経済成長や福祉の拡大の恩恵を受けている人々がますます少なくなっています。社会的な不平等が増してきています。貧しい人々は貧しいままですし、富める人々はますます富を蓄積しているというわけです。70年代まではまだ多くの人々は、教育、能力それに働くことにより実際に社会的な果実を手にすることができました。具体的には、人は休暇旅行にも行けましたし、誰もが一部屋持てるようなより良く、より大きな住宅を購入することができました。これは多くの人に対し安心感を与えました。翻って現在は、社会は全体としては確かにますます裕福になっていますが、その恩恵に与えるのは富裕層に限られるといます。

2011年末にはすべての従業員の内のほぼ三分之一が要請に基づいて働くか、期限付の給料

の低い契約をしているか、フリーとしてずっと低すぎる報酬で働かなければなりません。そしてこの状況は既に記載した通り、学者（研究者）にも及んでいます。その例としてフンボルト大学でゼミを行っているある女性大学講師が紹介されています。彼女は自分がいつか期限の定めのない雇用を得られかどうか、大学のあるベルリンに居られるかどうかまたは引越しをしなければならないかどうか、そして彼女の期限付契約の満了後は再び失業してしまうのではないかと分らないといっています。この女性講師は、講演で成果を上げ、学術論文を發表し、社会学の専門分野における学術的な従業員として授業をし、働いていともいます。しかしながら、この講師の両親は彼女のことをとても心配しています。両親はなぜ彼女の職業上の将来がずっとこれほど不安定のままなのか理解することができません。

大学に留まろうとする者は、何年もの間短期の期限の定めのある契約に満足しなければならないとのことです。これらの契約のため長期に亘る将来および家族計画が困難になっています。大学教授の職をようやく手に入れた者は、平均するともう 42 歳になっているとのことです。そして 12 年経ってもこれが叶わなかった者は、その時は大学を辞めなければならないといっています。しかしながら、この 12 年の間、しばしば 3 年間の雇用契約を更新して締結できず、半年間の雇用契約しか結べない場合があります。そのため学者（研究者）たちは落ち着いて研究に打ち込むことがほとんどできなくなっているとのことです……。

また、今回の放送・課題では経済的な理由で医者にかかれなくなった中間層（中間階級）の人々のための診療所 „Praxis ohne Grenzen“ についても触れられています。お金を取らないで患者のために週 1 回は自分の診療所を開いている医師（Dr. Uwe Denker）のところには、ホームレス、パスポートを捨ててしまった不法移民、戦争難民それに難民認定申請者などはほとんど訪れません。その診療所にやって来るのは、稼ぎが少なくてもその中から医療保険を支払えない中間層の市民たちということです。

その中には例えば保険会社でフリーとして働いている保険外交員がいますが、十分な収入がないため、自分自身は保険に加入していないといっています。2015 年にこの医師のもとを訪れた患者の中には、出版社勤務のフリーの従業員、飲食店の主人、美容師、不動産仲介業者、大工、れんが積み工の親方、鉄骨建築エンジニアなどあらゆる職業の人々がいました。

さて、今回放送で紹介された Dr. Uwe Denker の活動についてホームページで調べたところ、2010 年にシュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州の小さな街 Bad Segeberg での診療所の開設によりスタートしたこの活動拠点は、放送当時の 2016 年 6 月時点で同州で 5 箇所、ドイツ全体では 20 箇所だったということですが、現在では同州だけでも 9 箇所に拡大しているようです。ドイツ全体でのデータは入手できませんでしたが同様に増えているも

のと思われます。Dr. Uwe Denker は第二次世界大戦中に生まれたとのことですので既に70歳代でしょうし、本来なら年金生活をしている年代ですが、自分の本来の診療所は娘に譲りつつ、多くの賛同者・協力者を得てボランティアとして„Praxis ohne Grenzen“の活動に熱心に取り組んでいる様子が窺われます。診察の結果手術が必要になった患者は市立病院に搬送されますが、処置費用は診療所の負担とのこと。診療所の経費は主に寄附でまかなっているようですが、行政からの資金援助があるのかどうかまでは確認できませんでした。

今回特に印象に残ったのは、Dr. Uwe Denker の診療所に来た患者の中である保険外交員です。顧客に保険を販売しながらも自らは収入が少なく保険に加入できないというのは驚きましたし、何と言う皮肉でしょうか。確かに雇用者がこれを知ったら驚き、落胆もし、怒りを感じるだろうと想像できます。

また、„Praxis ohne Grenzen“という名称は„Ärzte ohne Grenzen“（「国境なき医師団」）を連想させました。

ところで、中間層（中間階級）の縮小については日本でも大きな問題になっておりますが、中々解決の糸口が見つかっておらず、苦慮しているというのが実態だと感じます。おそらくこの問題を一気に解決できるような「特効薬」などは存在せず、有効と思われる様々な方法を組み合わせながら、少しでも状況の改善を図る以外に道はないのではないかと思います。

K. K.